

未来のために、過去に学び、 自分の生き様を 楽しんで設計しよう

大河ドラマなどの歴史番組の時代考証や解説をとおして、戦国史のおもしろさを発信している小和田哲男さんに、歴史の陰から見えてくる史実の醍醐味を語ってもらいました。

「歴史博士」の称号をいただく

歴史上の武将達の生き様、合戦の駆け引き、合戦の舞台となった城の仕掛けなど、戦国史に興味を抱くようになったのは、小学生の頃の出来事が始まりです。母親が結構な歴史好きで、家には歴史の本がたくさんありました。テレビもない時代でしたから、母親が歴史の話をよくしてくれて、小学校低学年ですでに歴史に興味を持っていました。

「人」という字を書いて、熟語になると「人」を「うど」と読むと教えてくれました。先生は、「狩人」を例に挙げ「他に知っているか？」と問われた時、私は「落人（おちうど）」を知っていたので恐る恐る手を挙げて答えました。先生に「どういう意味だ」と聞かれたので、「源氏と平氏の戦いで、負けて山奥へ逃げていった人たちのことです。今も子孫がいます」と答えました。先生は、「小和田は歴史博士だな」と言うてくれて、そのことが嬉しくて歴史だけは誰にも負けないと決心しました。

歴史学者

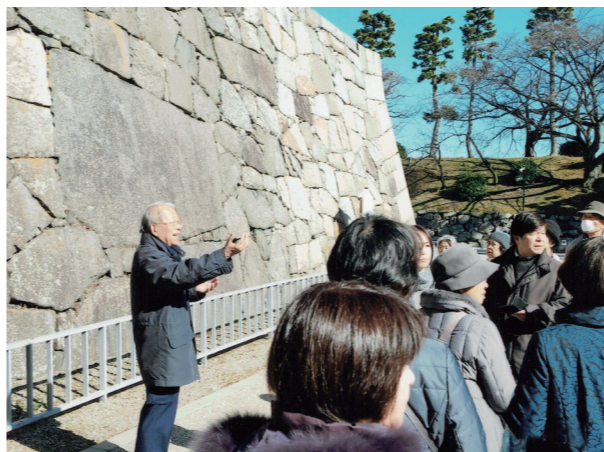
小和田 哲男 さん



民衆の視点で 戦国時代を洞察する

ところが、大学では「歴史好き」だけでは通用しないと先輩達から教わりました。合戦で勝った負けただけでなく、武将達がどのようにして勝つための戦略を練ったのが大事だと。平たく言えば、富国強兵がヒントです。戦いに勝つためには国を豊かにしなければいけません。武将達の国を豊かにする知恵を掘り出そうという思いで、修士論文は戦国大名の経営手腕をテーマにしました。

「民衆の立場で歴史を見る」と先輩からアドバイスを受け、戦国史を、戦う武将ではなく民衆の立場で研究することで視野が広がりました。いわゆる、社会的な研究の視点を、この頃に身に着けたと思います。



史跡めぐりの旅で同行講師をつとめることも

なりしていると考えられますから、隠されている部分にも光を当てないと、本当の歴史は描き出せないと思っています。今川義元、明智光秀、石田三成など、どうも世間から「軟弱だ」とか、「バカなことやってんだ」と言われる武将に親近感を持ちシンパシーを感じます。負けた側の書き残せなかつた無念さを、晴らしてあげたいと思います。

歴史を学び、歴史に学ぶ

越前の戦国大名朝倉氏の家臣の一人、朝倉宗滴（あさくら そうてき）が記した『朝倉宗滴話記』は、みなさんに読んでいただきたいと思っています。その中に「巧者の大将と申すは…」とありまして、「名将と言えるのは、大敗北をした者だ」と書き残しています。それに「番当ではまるのが徳川家康です。1572年12月、浜松の三方ヶ原（みかたがはら）の戦いで負け戦をしました。しかし、それから家康の家臣への接し方が変わり、自分の身代わりで死んだ家臣がいった反省から、家臣を大切に思うようになりました。『宝の中の宝といふは 人材に如（し）くはなし』は、家康の名言です。このように、失敗例から学ぶことは、武将達の生き様から受け取るメッセージだと思っています。

歴史は鏡です。例えば、平安時代の歴史物語の『大鏡』や『今鏡』、鎌倉時代の

歴史の陰に光を当て 史実を伝える

歴史は勝った側が都合よく書き残します。その例が、太田牛二（おたのぎゅういち）の『信長公記（しんちょうこうき）』です。織田信長の家臣が残した信長の伝記なので主人の傷になるようなことは書かれていません。そのことに気がついたのは、安土城築城のシーンです。『信長公記』には、信長様のお知恵で容易く大きな石を上げたときだけ書いてあります。ところが、宣教師のルイス・ロイスが残した『日本史』には、大きな石を上げる際、片側に石が滑り出たために石の下敷きになって150人が死んだと書かれています。これは、同じ石のことでしょう。信長は、事故を隠蔽しています。だから、この部分だけではなく、他にも隠蔽工作をか

「水鏡」や「吾妻鏡」は、いずれも鏡という字が使われています。要するに、過去を鏡に映し未来を照らすわけですから、過去は単なる過去ではなく、未来のための過去になります。過去と現在と未来がつながり、自分の生き様をいろいろと設計するために過去があります。だから、先人達の知恵をいつまでも学ぶべきです。今の目標は、先人達の知恵を活かし、自分の足で見聞きし調べ上げた日本の城の研究を集大成させたいと思っています。

Owada Tetuo

歴史学者、文学博士。1944年静岡市生まれ、早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。静岡大学名誉教授。NHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」などの時代考証や歴史番組での解説で、戦国史のおもしろさを発信している。『家訓で読む戦国 組織論から人生哲学まで』（NHK出版新書、2017年）、『井伊直虎 戦国井伊一族と東国動乱史』（洋泉社歴史新書y、2016年）など著書多数。全国の城を訪ね、地方の地酒に眼がない。